

## 第4段階：ガリラヤにおける大宣教

### ㊦ガリラヤ巡礼に至る重要な出来事

#### 2. イエスは一言で人を死から蘇らせる

##### デイリー・ジーザス・ニュース #082

基本テキスト: ルカ7.11-17 (並行テキスト: なし)

11 その次の出来事は、イエスがナインという町へ行かれた時のことである。弟子たちと大勢の群衆もイエスに従っていた。12 イエスが町の門に近づかれると、母親のひとり息子が死んで運び出されていた。母親は未亡人であった。町から来た大勢の群衆も彼女と一緒にいた。

13 主は彼女を見て、深く憐れみを感じ、こう言われた。 **「もう泣き続けるのはやめなさい。」**

14 それからイエスは近寄って、イエスを乗せていた棺に触れられた。すると担いでいる者たちは立ち止まり、こう言われた。 **「若者よ、命じる。起きなさい。」** 15 すると、死人は起き上がり、ものを言い始めた。そこでイエスは彼を母親に返された。

16 彼らは皆、畏敬の念に満たされ、神に栄光を帰しました。「偉大な預言者が私たちの間に現れた。神はご自分の民を助けるために来られたのだ。」

17 イエスについてのこの噂はユダヤ全土とその周囲の地方全体に広まった。

=====

注: 私たちは「混合テキスト」の原典福音書を次のように上付き文字で識別します: マタイ = <sup>MT</sup>、マーク = <sup>M</sup>、ルカ = <sup>L</sup>、ヨハネ = <sup>J</sup>、使徒行伝 = <sup>A</sup>。この「上付きID」は引用文の冒頭に挿入され、別の上付き文字が現れるまでその聖書を識別します。さらに、**イエスの言葉は赤字で斜体で書かれています**。旧約聖書からの引用は大文字で書かれています。

コンテキストダイジェスト	
位置	ガリラヤのナイン
タイムライン	西暦31年5月 (第16月)
イエスの生涯の文脈	第4段階：ガリラヤにおける大宣教
	㊦ガリラヤ巡礼に至る重要な出来事
タイトル	2. イエスは一言で死人を蘇らせる (奇跡その11)

コメント：

## 第4段階：ガリラヤにおける大宣教

ルカは山上の教えの直後に、二つ目の力強い奇跡を記録しました。前の朗読で百人隊長のしもべが癒されたように、11番目の奇跡は、イエスが最後に示した、権威ある御言葉という確かな土台の上に人生を築くという例えを劇的に強調しました。

イエスの言葉の絶対的な力を示すこれら二つの連続した例の類似性と繰り返しは、ルカによって特別な強調のためにこの順序で並べられました。この二つの奇跡を目撃した使徒と弟子たちは、誰一人としてそれを忘れませんでした。私たちも忘れてはなりません。

奇跡10では、イエスはカペナウムで臨終の床についた若者を、遠く離れた場所から、ただ一言で瞬時に癒されました。そして奇跡11では、イエスはもう一人の若者を、ただ一言で死から蘇らせました。イエスの言葉が生と死に及ぼす権威こそが、この奇跡の核心です。

主はカペナウムから南西約56キロ、ガリラヤの南端にあるナインまで旅をされました。少なくとも二日間の旅で、一泊する必要がありました。その旅の目的地として最も可能性が高いのは、ナタナエルの故郷であるカナでした（ヨハネ21:2）。イエスは少なくとも二度カナに滞在しており（ヨハネ2:2と4:46）、ガリラヤ南西部からナイン湖への旅の途中で、カナを定宿として利用されたと考えられます。（この地域には、シモニア、ラフィア、エクサロテ、ナイン、セフォリス、アスコキス、ナザレなどの町がありました。）

がイエスの権威を生き生きと描写するために物語を意図的に構成したことに加え、イエスの生涯を年代順に研究する私たちは、イエスが最後の審判の時に、歴史上のすべての死者を一言で復活させると既に主張していたことを知っています（ヨハネ5:25、28-29; DJN #062）。イエスはこれを、わずか1ヶ月前の二度目の逾越祭で語りました。そして今、イエスは、自分が言ったとおりの権威と力を持っていることを証明しました。したがって、ナインのやもめの一人息子を生き返らせたことは、福音書の中でイエスが永遠の命を与える権威を持っていることを示す重要な証拠です。

の言葉の驚くべき力を際立たせていましたが、以前の奇跡とは異なり、この奇跡の恩恵を受けた未亡人には信仰を必要としませんでした。イエスの奇跡のほとんどは、癒しを受けた人々の信仰によって起こりました。しかし、この奇跡のように、奇跡を受けた人々が全く予期していなかった、イエスの純粋な思いやりと慈悲の美しい表現であった奇跡もありました

このような奇跡が起こったのは、イエスが無条件の、無償の贈り物として与えたいという強い思いに動かされたからにはかなりません。主は未亡人に対して深い憐れみを抱かれました。彼女の涙は、主の魂の奥底に触れたのです。

**「主は彼女を見て、憐れみの心を抱き、『もう泣き続けるのはやめなさい』と命じた。」**

夫の存在と財産がなければ、未亡人は無力でした。この一人息子は、未亡人にとって唯一の生きる希望でしたが、今や奪われてしまいました。夫と息子を失った二重の悲しみに加え、この女性は困窮していました。イエスはこの現実深く心を打たれました。イエスは彼女の悲しみの涙を止めさせ、言葉に尽くせない喜びの涙を流させました。

の息子の復活の状況は、列王記上17章22節でエリヤがゼラファテの未亡人の息子の復活を祈った場面と似ていました。人々はイエスの奇跡をそのような意味で捉えていたようで、「偉大な預言者が私たちの間に現れた。神はご自分の民を助けるために来られた」と言いました。エリヤは聖書の中で祈りを通して復活

## 第4段階：ガリラヤにおける大宣教

を経験した最初の人物です。同様に、イエスの奇跡11は、イエスが宣教活動の中で死者を蘇らせた最初の例でした。その後も、奇跡は続きました。

しかし、エリヤとイエスの間には重要な違いがあります。エリヤは神に祈り、やもめの死んだ息子を生き返らせてくださるよう求めました。イエスは祈ったのではなく、神として行動し、死んだ息子に生き返って立ち上がるよう命じました。イエス」の神としての権威は、イエスが「**息子を母に返した**」という行為によってさらに強調されました。イエスはこの若者の生、死、そして復活に対する完全な権限を持っていました。イエスが「息子を返した」のは、息子を完全に支配していたからです。

死を即座に止める力を持つのはイエスだけです。それは、イエスが棺に触れ、墓へと向かう行列を即座に止めたことから明らかです。一言、あるいはただ手に触れるだけで、イエスは苦もなく生と死を支配しました。イエスは永遠の唯一の確かな基盤です。私たちの必要を気遣ってくださいます。私たちの涙、痛み、悲しみ、そして悲しみに深く心を動かされます。イエスは生き、慈悲の心を体現しておられます。イエスに匹敵する者は他にいません。

応用：

イエスは、傷心した未亡人の一人息子を、彼女への憐れみから惜しみなくお救いになりました。その同じ憐れみゆえに、イエスは神の一人子でありながら、私たちのためにご自身を惜しみませんでした。御父もまた、その憐れみゆえに、私たちのために御子を惜しみませんでした。私たちは、人生においてどんな境遇にあっても、福音書に記されたこのような場面を通して、三位一体の神が私たちを憐れみ深く見守ってくださることを確信できます。

今日、あなたはキリストの慈悲深い愛にどう身を包む必要がありますか？

イエスをご自身を一切惜しまず、私たちが当然受けるべき裁きを免れたという事実は、私たちに対するイエスの憐れみの証です。あなたはどのようにして、イエスの憐れみを掴むことができるでしょうか。